Interview

ジョイフル

VOL.49
2022.9.22 発行

豊田営業所　知立出張所　業務課長

石田 高悠（いしだ たかひろ）

2006年（平成18年）にドライバーとして入社し、現在は知立出張所を束ねるポジションを担う石田高悠さん。どんな相談でも親身になって話を聞き、ドライバーからもお客様からも、「石田さんに相談して良かった」と頼られる存在となっています。今回は、入社からの経験を追いながら、石田さんの仕事に対する思いを伺いました。

――入社の経緯を教えてください。

前職では消防士をしていたのですが、家庭の事情で退職し愛知へ。自動車整備士の資格を持っていて運転も好きだったので、ドライバーを志し、何件か運送業の求人に応募しました。その中で、最初に面接を受けたのが南星キャリックス株式会社です。

入社の決め手は、シンボルマークが大きくダイナミックに描かれたトラックに一目ぼれしたこと。「目立っていてかっこいい」と思い、ぜひ運転してみたいと感じました。

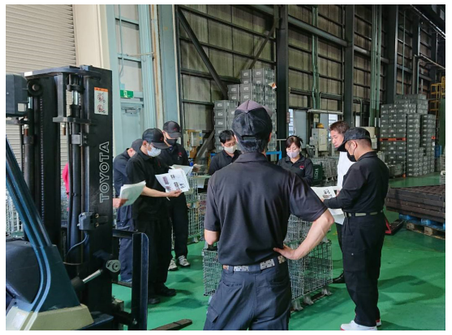
――実際に入社してみて、いかがでしたか。

思っていたよりも大変だという印象を受けました。消防士と比べたら楽に感じるかと思っていましたが、業務が想像以上に多く、驚きの連続。荷物の積み方1つにしても、頭を使うものなのだと知りました。

それでもすぐに職場に馴染めたのは、先輩たちが気さくに話しかけてくれたから。入社当初は26～27歳で、「若いんだからバリバリ働きなさい」と言われ、走り回っていました。

――2016年頃にドライバーから管理者へ転向。どのように仕事に取り組んできたのでしょうか。

ドライバーの目線に立ち、一緒に仕事へ向き合うことを意識してやってきました。例えば、ドライバーから「休憩が取れない」と相談を受け、便編成の代案を作って荷主さんに直談判したことがあります。交渉の結果、納品先は増えていないにもかかわらず1便増便していただき、休憩が取れるスケジュールに。この交渉がなければ、ドライバーが何人か退職してしまっていたかもしれません。



――管理者として順調にスタートを切ったようですが、挫折経験などはありましたか。

管理者になって4年目の頃、ストレスからか十二指腸潰瘍を患い、1年に2回入院したことがあります。2回目は出血が多すぎて、病院に向かう間に意識が朦朧とし、医師からは「30分遅ければ命はなかった」とまで言われました。

入院中は、「自分は管理者の仕事に向いていないから辞めてしまおうか」と思い悩んでいました。ところが、病院が営業所から近いものですから、ドライバーが入れ代わり立ち代わり病院に顔を出してくれるのです。ベテランドライバーの中には、休日に来て丸1日話し込む人もいました。

それまでは、「自分が管理者なのだから」と、誰にも相談せず1人ですべてを抱え込んでいたように思います。しかし、入院をきっかけに「ドライバーに助けを求めていいのだ」と考えられるように。今も、皆には様々な面で助けてもらっています。

――仕事をする上で大切にしていることは何ですか。

消防士時代に言われた、「根拠を持って仕事をすること」を大切にしています。以前、作業時間が30分と定められている納品先さんがありました。しかし、ドライバーからは「どうやっても30分で作業を終えるのは難しい」と訴えがあったのです。そこで私は、ストップウォッチを持ってその便に同乗し、「門をくぐってヤードまで1分半、伝票処理で5分、荷下ろしで12分、固縛に10分、積み込みで10分」というように、各作業にかかる時間を1週間分すべて記録しました。このデータを片手に、「この固縛を納品先さんの方でお願いできれば30分以内で作業が完了できる」と交渉。すると、何とか要求を飲んでもらえたのです。ただお願いするだけではなく、現場の状況を理解し、根拠を持ってから交渉することは本当に大切だと思っています。

――今後の目標を教えてください。

数年のうちに、知立出張所を単独の営業所に戻すことです。知立出張所は、かつての知立営業所の自動車部品部門が豊田営業所の一部として残ったもの。再び営業所となるためには、まず売り上げが必要です。2021年には新しい荷主さんを獲得し、増便も行いましたが、現在20便ある定期便をさらに3便から5便は増やしたいところ。単独の営業所に返り咲いた際には、所長を務めたいと思っています。

管理者になっても、あくまで現場主義。多忙な時期には一緒にトラックに乗り込み、汗を流します。そうした石田さんの真摯な姿勢は、今後の南星キャリックスの発展を支えていくことでしょう。